注釈をよむ

――顕昭「袖中抄」の声点から1――

秋永一枝

（本稿のキーワード：**袖中抄の声点・顕昭の注釈・「かかふかかひ」・「いなをさの」・「をろのはつを」・「めさし」・「そかきくのしかみさえた」・「ゆきのよろしも」・「おちのまゆかき」**）

一　はじめに

顕昭の歌語の注釈は、現存するだけでも「古今集注・拾遺抄注・袖中抄」等々、厖大な量に及んでいる。それらは互いに共通部分を持つにもかかわらず、諸注を総合し比較した上での、注釈そのものについての研究はあまり進んでいるとはいえない。その理由は幾つかある。

西村加代子氏[1]が書かれたように、顕昭の文書は早く散逸してしまった。そのため古写本が残らなかったことも一つの原因であろう。例えば「古今集注」の場合、正確な声点を注記した古写本が数巻しか残らぬために、全巻の差声部分は後世の写本から推定できたとしても声点の認定はできず、廿巻全体の声点付校訂本の作成はむずかしい状態である。

また、顕昭の注釈は異説の多い難語をとりあげたために、先人の博引旁証にすぎて彼自身の説がぼやけてしまい、真意がつかみにくくなったことも原因の一つであろう。そこには以下に示すような突飛な解釈もまじり、独断にすぎる点などもあって解しにくい面もあるが、それを多少とも理解する一助となるのが声点の注記である。顕昭の注釈における声点注記歌の割合は、今までたびたび述べてきたことであるが[2]かなりの高率である。「袖中抄」における声点注記のある延歌数は、顕昭の声点注記時には四五％に近いものと推定[3]されるから、差声の示す意義を理解せずに彼の注釈を論ずることなどできない筈であるのに、今までなおざりにされてきた感が深い。これは一つにはアクセント史を専攻する人間のサービス精神の不足でもある。そこで、どのように声点を利用して考察していくか、数例を呈示して歌学研究者諸賢の批判を仰ぎたいと思う。

以下、見出しの「　」内は問題としたことば、〔　〕内の昌頭

漢数字は袖中抄の巻、算用数字は橋本不美男・後藤祥子「袖中抄の校本と研究」の頁数、（ ）内は久曾神昇「袖中抄」（日本歌学大系別巻二）の頁数、袖中抄の標題の順に示した。袖中抄本文は、その項で正確な声点注記のある底本から引用した。諸本の声点を引用する場合は、原則として高松宮本の本文を掲げた。高松本のKは鎌倉書写、Mは室町書写、Eは江戸書写を示す。諸本の声点に関しては拙稿「『袖中抄』声点考」[3]を参照して頂きたい。尚、引用文献は適宜（ ）内を省略して示した。

引用本文は適宜空けて文の切れめを示した。本文漢字の次の（ ）内片仮名は右振仮名を、ゴチックの声は双点を示す。

二　万葉集の注から

「かかふかかひ・うしはく神・まくし」〔十219（160）かゝふかゝひ」

万葉九1759の歌及びその注には京大本に以下の声点が注記されている。

わしのすむつくはのやまのもはきつの」そのつのうへにひきるきてをとめおとこの」ゆきあつめ加賀布（カカフ）孏（カ、ヒ）哥にことつまにわれもか」よはんわかつまにひともことゝへこのやまをうれ（し　イ）」はく神のむかしよりいさめすことをけふのみは」目串（マクシ）も見るなこともとかむな

顕昭云　かゝふかゝひとは万葉云孏哥者東俗語」曰賀我比（カカヒ）云々」今云　かゝひとはおとこにすてられたる女をいふ　此は」登筑波嶺為嬪哥会日作哥云々

童蒙抄云　ひとこふるかゝひもわをはいとひ」けりわしのけゝなくしらねこゆれと

越前守仲実哥也　かゝひとはおとこにすてら」れたる女をいふ……

まず「かかひ」が「かかふ」の名詞形という一般的解釈にたてば、「かかふ」の低起式と「かかひ」の高起式というアクセントの相違が問題となる。動詞のアクセントを中心に考えれば「かかひ」は低平型になるはずだし、名詞から考えれば動詞「かかふ」（連体形）は高平型になるはずである。それ故これは、顕昭がこの二語を同じ語源と考えなかったと解される。「ひとこふる」以下は「童蒙抄」[4]にも同様の記述があり、顕昭はその説によって「かかひ」を「男に捨てられた女」と解し更に次のように注する。

つくはねにかゝなくわしのねのまをか」なきわたりなんあふとはなしに

此哥の心はこのかゝひの事は筑波山にのぼりて」よみたるに又つくはねにかゝなくわしといふ哥もあれは　ふたつをとりあはせて　かのわしのなく」山をこゆれはかゝひにもあはすとよめるなるへし

顕昭は「男に捨てられた女」がなぜ「かかひ」〈上上上〉というかについてはふれてないが、恐らく、「かか鳴く」の「かか」と同じく泣き声の擬声語ととったのではあるまいか。男に捨てられた女が人を恋いしたってカカと泣くと。カカ言ヒと解したかも

しれない。「かかなく」は袖中抄以外にも和名（抄）・名義（抄）に〈上上平〉（終止形）の例があり、万一　カカ言ヒ〉カカヒであってもアクセントは合う。

次に「かかふ」〈平平上〉だが、このアクセントにあう語として観（智院）本名義仏下本38オ（73）に「擁　カヽフ」（平平上）がある。「擁」は抱きかかえる意であるが、「抱ふ」には古い声点注記例がなく、現在は㈠類動詞で高起式である点が問題である。なお、観本名義の「拘・鉤」や金沢文庫本春秋巻十七の「以戟（ホコヲ）鉤（カン）レ之」[5]には〈平上平〉の差声があるがこちらは「ひっかける」の意であり別語と考える。また「抱ふ」は下二段動詞である点にも無理があるが、「かゝふかゝひ」を「抱きかかえる、男に捨てられた女に」とでもとると妙に生々（なまな）しい解釈となってしまう。もう一つ、振仮名が「孀」にあることから、「かゝふかゝひの哥に」ととった可能性も出てくる。もしそうとれば、「ことつまに」以下はその哥にあるということになる。そうでないと、「男にすてられた女に、その異妻に」[6]となって解釈が無理になってくる。

更にこの注には「領有する意」の「うしはく（神）」に〈上上平上〉という差声がなされている。この語源は一般に「大人（うし）」からとされるが、「三熊之大人（みくまのうし）」には左の声点が注記される。

〈平上〉弘安本乾元本等日本書紀[7]、〈上上平〉御巫本日本書紀私記[8]

弘安本乾元本等の日本書紀には声点が合わぬが御巫本日本書紀私記の一方にはあう。だが「はく（佩・帯）」は和名抄・名義抄で〈上平〉であるから袖中抄に合致しない。そこでこれは、万葉集のこの箇所の「牛掃神」の表記そのまま、「牛」〈上上〉「掃く」〈平上〉の声点を記したのではなかろうか。次に続く「目串（マクシ）」の〈平上平〉も「目」〈平〉と「串」〈上平〉がそのまま複合した形を注記したものと思う。

顕昭には結局「うしはく」も「まくし」も解釈できなかったために、声点だけ差して注釈はしなかったものと考えたい。

「いなをさの」〔十五330（235）かひのけころも〕

顕昭は風俗歌二十二の「いなをさの」の語釈に万葉集十四3351の「伊奈乎可母」を援用して、次のように記している。

上上上平　平上平上?　上上上平平上平上上上
カヒカネニシロキハユキカイナヲサノ」カヒノケコロモサラス
平平平平　上上上平上上平上上上
テツクリ」

顕昭云是ハ風俗哥也……」イナヲサトハ万葉哥云」
上上上上　上上平平上平上上上平上上上上上
ツクハネニユキカモフラルイナテカモ」カナシキコロカニヌ
上平上　平
ホサルカモ」

……イナテカモハイナヲサノニ、タリ……　然者イナヲサハ人ノ名カトキコユルニ」此常陸哥ニイナテカモトヨミタルハイナトカモトイフ心ハ」ユキノフルカ又サモアラヌカト云心也　サレハイナハイナト云」詞欤　オサハ長欤　ナニコトニモオサト云事アレハ衣サラス」人ニテアルヘシ（高松本K）

万葉3351の原文は「伊奈乎可母」であるが、「類聚古集巻第十六」（複製。大正三年三月刊）には「伊奈手可母」[9]とあり「いなてかも」と訓む。複製では不明だが、原本を閲覧した「校本万葉集」では「類」「手」。モトノヲ磨リ消シテ書ケリ。」とある。恐らく書写の人が初めに「乎」と書いたのを消して「手」と直したもので

あろう。「類聚古集」の編者藤原敦隆が、「乎」説にたつよりも「手」とする方が歌意がとれるとしたものであろう。風俗歌の「伊奈乎佐乃」は、万葉の「伊奈乎可母」からの転であり、注釈のように「イナテカモハイナヲサノニ、タリ」とするのはいささか苦しい。当時「イナテカモ」と訓まれていたことと、「イナヲサノ」は「イナテカモ」の転訛であるという誤伝が通行していたせいであろう。小西甚一氏の頭注（岩波大系「古代歌謡集　風俗歌」）では「いなをさの」は、「いや、どうだかわからない。「いな」に間投助詞の「を」がつき、それにはやしことばの「さの」がついたものと、いちおう解しておく。万葉集に……見える「いなをかも」は、おそらく同じことばで、それが訛伝されて「いなをさの」になったものらしい。……実際は「稲長（いなをさ）の」ある いは「否、長（をさ）の」と解してうたったのかもしれない。」とある。日本国語大辞典は「稲長」の項に、久安百首の「降つもるしらねの雪はいなをさのかゐのけ衣ほすとみえけり」（藤原隆季）をのせるが、この歌は風俗歌の「いなをさの」を「稲長」と解した上でのいわゆる本歌取の類であろうか。

さて袖中抄高松本「かひかねに」の歌をみると、第一句・第二句のあとの間隙はごくありがちなことだが、「イナ」（平上）と「ヲサノ」（平上?）の間に同じくらいの空隙があることが問題である。恐らくこれは、顕昭自筆本で意識的に空けたものを鎌倉書写の人が忠実にうつしたとみられるもので、「否を・然（さ）の」でも「稲長の」でもないことを示していると思う。「サ」の声点は紙つぎの左紙にあって、第一画の起筆の心もち下に位置するが、他の声点注記から推して、「平声?」とせず「上声?」として差し支えないものと思われる。

アクセントは「稲（いね）」も「否」もともに〈平上〉であり、「稲（いな）」を前部成素とする四拍名詞は〈平上○○〉か〈平平○○〉であるから、この部分だけではいずれとも決定することができない。但し、「長（をさ）」は京大本袖中抄（巻六）・名義抄ともに〈平上〉である。「稲長」であれば〈平上〉（四類）十〈平上〉（四類）であるから、顕昭の頃は〈平平平上〉になる確率が高い。[10] 同じ語類の複合をする「稲舟」が古今集1002にあり、袖中抄高松本鎌倉写・京大本・前田本及び顕昭古今集注にともに〈平平平上〉で差声されている。袖中抄高松本の同じ歌の直後に「イナトイハムレフニイナフネトハイフナリ」とあるのは、「否」を強調しての差声で、「稲舟」本来の声ではないとみる。もっとも〈平上○○〉の声が全くないというわけではないが、少なくとも複合名詞一語の内に高い部分が二箇所以上あることは許されないから、〈平上平上〉で「稲長」とすることはできないというわけである。そこで注釈の、イナは否か、ヲサは長か？　の解釈に立った上での声を差して、なおその上に二語の間に空間をつくり、「いなをさ」が一語ではないことを示したとみるのがよかろう。即ち、「甲斐が嶺に白く見えるのは雪か？　いや、長の……」と顕昭は解釈したと考えたい。

「をろ・はつを・なに」〔十二266（192）をろのはつをにかゝみかけ〕

万葉集十四3468（東歌）の歌には高松本・京大本・前田本に左の

ような差声があるほか、諸本をひいての長い注がある。諸本の声点の問題のある注を中心に少し長いが引用する。

ヤマトリノ乎呂(ヲロ)ノ　波都乎(ハツヲ)ニ　加賀美(カカミ)
(高K)　上平○(1a)　平上上○(2a)　平平平
(京・前)　平平○(1b)　上上平オ○(2b)　平平平

カケ」トナフヘミコソナニヨソリケメ
平上　上上上上平上平上上上上上平?平上
平上　上上上上平上平上上上上上平上上
顕昭云ヤマトリノヲロノハツヲニカヽミカケト」ハフルクヨリハフタ様ニイフコトアリ　ヒトツ」ニハヤマトリカヽミニカケノウツレルヲミテ」マフトイヘリ　ヒトツニハコノカヽミカケトイフ」ハマコトノカヽミニハアラス　ヤマトリハメヲト」コヒトツトコロニハネス　山ノヲヽヘタテヽヌルニ」アカツキニヲトリノハツヲニ(京前はつおに)(上上平)メトリノカケ」ノウツルヲミテナケハソレヲハツヲニカヽミ」カクトハイフナリ…」…此二義」ノナカニサキノ義ニテハ尾ニカヽミカクト」イヒカタシ　後義ニテハヲロハ(京前をろは)(上上平)雄也(11)只(この字に〳〵をかける)(ロハ欠)助字」也　後ノハツヲハ(京前同声)(上上上)ナキヲ(京前同声)ハヽシメニオフレハヽ」ツヲトイヘハ本哥ニハカナヒタリトマウスメリ」今案　ヤマトリノ尾ニアカツキコトニメトリ」ノカケノウツラムコトイカヽトキコユ　文書ニ」モイハス　イカテカサルコトアルヘキ　又キナ」カノモノ、マウスハ山鳥メヲヒトツトコロニフ」ストイヘハマツヒトツタカヘルコトアリ　マシテ尾」ニカケウツラムコトアリカタシ…」…ヲロトハ(京前をろとは)(上平)雄トリ也ツキノハツヲハ尾ニハ」アラスソレモ尾トイフ文字ヲハカヽス　乎」トイフモシヲカキタレハナヲ雄トリトコ、ロ」ウヘシハツトハ(京前はつとは)(平上)初トイフニハアラス　共トモヲ」ハナレタレハクラヲカヌムマヲハ(京前くらをかぬむまをは)(上上上上上平平?上上上上平平)ハツムマト(京前同声)(平平平)イ」ヒハツセト(京前同声)(平平平上上)イフヤウニヒトリアルヲトリヲハツ」ヲト(京前同声)イフヘシ

歌中の、「鏡」の〈平平平〉、「唱ふべみこそ」の〈上上上上平上平〉は、解釈と声点が一致して問題はない。顕昭が二義ありとした、「をろのはつを」が高松本と京大本・前田本で異なった声が差してある点が不審である。高松本の巻十二は、正安二年阿闍梨祐尊の執筆とある善本である。ただ巻の前三分の二では振仮名以外には大部分朱圏点が差されており、この歌からあとの三分の一ほどが朱星点となっている。巻十二の書写の字体は同一と思われるし、朱点を原本よりうつした人が圏点と星点で別人という証拠もない。後半を手間のかかる圏点で書くよりも簡単に差せる星点で書くことはごくありがちなことである。そこで注釈に記された顕昭の解釈から、歌の声点の吟味をしよう。

まず万葉集の注釈書をみると「乎呂能波都乎尓」の解釈では「尾ろ」は諸注変らないが、「はつを」は「秀つ尾・端(は)つ尾・初麻」などがあり一定してない。袖中抄では「をろ」が「雄ろ・尾ろ」、「はつを」が「離つ雄・初尾」両様の説を紹介し、歌もまた

高松本と京大本・前田本で声が異なる。

「雄」は上声、「尾」は平声である。第二句の高松本（1a）は注釈にある「後義」の「ヲロハ雄也」や「今案」の「ヲロトハ雄トリ也」の注と一致した「雄ろ」〈上平〉の声を差す。この声は、京大本・前田本の前記注部分の声とも一致する。京大本・前田本の〈平平〉（1b）は「尾ろ」と解したためか、振仮名の小字故の誤写か不明だが、次の「はつを」との関連で考えると誤写とは思えない。「初…」は〈上上…〉であり、注釈中の「後ノハツヲハ」（上上平）の三本の声は、注釈から考えても「初尾」としてよく、歌の第二句の京大本・前田本の〈上上平〉（2b）も同様である。高松本が〈平上上〉（2a）とあるのは、「今案」の「尾ニハアラス」「ハツトハ初トイフニハアラス」「ヒトリアルヲトリヲハツヲトイフヘシ」等の注や声と一致する。恐らく「離つ」〈平上上〉という動詞プラス「雄」と考えたものであろう。ここで同じ動詞を前部成素とした「ハツムマ」（平平平）「ハツセ」（平平平）をひくが、これは「馬」〈平平〉、「せなか」（平上上）の「背」〈平〉との複合で低平型でよいだろう。(12)（但し色葉字類抄・名義抄には「怙騎」の訓に「ハツセ・ハツマ」があり、後者は観智院本には〈平平〇〉、鎮国守国神社本には〈平平平〉の声があり、第二拍は濁音である。これは、万葉の「波豆麻」1273の俗解から出たものか。）

頭昭は二義を紹介し、次に彼自身としては「（ハツ）乎」と書いて「（ハツ）尾」と書かぬことから「雄ろの離つ雄」をよしとしたのだから、歌の差声は高松本が合致するとみてよい。では京大本・前田本がなぜ「尾ろの初尾」の差声をしたか、誰の声点と考えるべきかだが、恐らくこの声の部分は頭昭差声の移点ではないだろう。歌のすぐ後に「初尾」の声が続くことから、声についての理解が深い移点者が「尾ろの初尾」を意図して差声したものを書写したのかもしれない。

第三句の「鏡」は問題ないが「カケ」（平上）は「掛け」と「影」の二様の解がある。袖中抄は稀にしか濁を示す双点を差さない上、「掛け・影」はともに〈平上〉で声点による区別ができない。前出の「今案」以下に続く注では「カヽミヲソノ雄トリノヲニハカケネト　タヽカタハラニカケテミスレハ　カヽミカケトハヨメリ」とあるので、「掛け」ととってよかろう。但し俊頼の歌に「ヤマトリノハツヲノカヽミカケフレテ……」の歌をひいて「愚案ノコトクマコトノカヽミヲカケタルニタカハヌコヽロヲ存セルカ　オホツカナシ」とし、第五句に関連して左のように注する。（上上上）

又ナニヨソリケメトハヨソリハヨルトイフ詞也　ヨソルトモヨサレトモヨメリ　トナフヘミハ唱ト云事也　カヽミノ□ケヲミテナケハヤマトリカ、ミヲミテナクトハヤカテ名ニヨレル事也トヨメルナルヘシ

「名」は㈡類名詞であるから「名に」は〈上平〉であってほしいが、三本ともに〈上上〉で、これでは㈠類の「汝に」の声になってしまう。万葉集の注釈書では「汝に寄そりけめ」とあり、沢瀉久孝氏(13)は「山鳥の鳴き立てたやうに、噂に立てらるべきによつてこそ、お前さんに寄せられたのであらう」とされる。私個人としてはこの声を「汝に」とし、「名に」がかけられているとみたい。更に頭昭はここで「鏡の影を見て鳴けば」とあって「影」の

解も捨ててないようである。このあたり、顕昭自身の解釈が最後までゆれていたと見てはいかがであろうか。

三　古今集の注から

「**めさし**」〔二42（41）いそなつむめさし〕

	こよろきの	いそ	たちならし	いそな	つむ	めさし	ぬらすな	おきに	をれ	なみ
京本	平平上上○	上上	平上平平上	上上上	上上	上上平	上上平上	平平上		
大	同	同	同	同	同	同	同	平平○	上平	
天片	同	同	平上平平○	同	同	同	同	平平○	上平	

古今集廿1094の歌には、京大本に「顕昭　古今集注」（大東急文庫本。略称「大」・天理片仮名本。略称「天片」）とほぼ同一の声点が注記されている。今三本の声点を比較すると左のように酷似している。

「めさし（少女）」の語源は、子どもの額髪が目を刺すほどの長さから転じたとされている。古今集1094には定家本系統など（高松宮家嘉禄本・京大中院本・寂恵本・毘沙門堂本・梅沢家本）に〈平上平〉が差されており、先の顕昭本や古今訓点抄の〈上上平〉注記と相違する。

「目」は平声、「刺す」は㈡類動詞であるから、名詞○○＋動詞、○●の複合名詞の法則となる。古今集で同じ複合の「根摺り・野飼・穂立ち」や袖中抄の「根摺り」などは〈平平平〉型だが、ともにこれらは根デ摺ル・野デ飼ウ・穂ガ立ツ（穂ニ立ツ？）のように名詞が副詞的用法をするものである。[14] 古今集や袖中抄の「野守」も、定家本などの「目刺し」と同じく〈平上平〉だが、これはともに目ヲ刺ス・野ヲ守ルのように名詞を目的格としている点が「根摺り」などとは異なる。こうしたアクセントの相違は現代語にも通うもので、定家本系統などの〈平上平〉は「目を差すほどの額髪の長さ」から解釈したと考えてまず間違いはない。

では顕昭の解釈はどうか。袖中抄ではこのあと次のように注する。

顕昭云めさしとはめのわらはへこわらへなり……めさしといふゆへをは釈せられねと人をいふと侍るはあたれり

なお、「海人のめさし・玉のめさし」にも左の声点を注記する。

アマノメサシノ　平平上上上平○（高本M）
　　平平上上上平○（京本）
タマノメサシニ　平平平上上平○（高本M・京本）

「目」は平声であるから語源的に合わず、「女（め）・妻（め）」は名義抄で去声、古今集・袖中抄などで上声であるから語源的に一致する。顕昭は「めさし」の語源を解釈することはできなかったが、「女の童（わらはへ）」と考えたところからともかくも「女（め）」の声をさした。

「さし」は恐らく「差し」と考えたのではなかろうか。同じような語構成で「戸ざし（鎖）」があるが、左のようにすべて●●○型の声である。

「扃」　度佐之〈上上平〉　前田本・高山寺本和名抄

「扃」　トサシ〈上上平〉　観本名義

トサシ〈上上平〉　顕昭後拾遺抄注[15] 396

「女差し」ではいかな顕昭でも語源の説明がつかなかったが、「女」の解にたって一応いつも発音しているアクセントを注記したものだろうか。なお、この「女の童」説は教長の「古今集注」によったもので、清輔の「奥義抄」の説である「海人の漁具の竹籠」説によってないことをつけ加えておく。

四　拾遺集の注から

「そかきく・しかみさえた」〔十二263（190）そかきく〕

拾遺集十七1120・拾遺抄418（426）の歌には高松本・京大本・前田本ともにほぼ同一の声点が注記されているが、これに顕昭の拾遺抄注（成簀堂本）・浄弁本拾遺集の声点を加えて比較してみる。（＊は傍注）

	カノ	ミユル	イケヘニ	タテル	ソカキクノ	シカミサエタノ	イロノ	テコラサ
高K	上平	平平上			平平平上○	上上上上上平○		平平上上
京本	同	同			同	同		平平上上
前本	同	同			同	同		平平上上
顕拾遺					平平○○○	シカサスエタノ 上上平上○○○		
右注					＊ハ常説 平	＊ミサ常説 上上		
浄拾遺					平平平上○	しけみさえたの 平平平上上平○		平平上上

ここで同じ顕昭注である袖中抄（a）と拾遺抄注（b）で若干の異なりがあることに注目したい。

a 顕昭云　ソカキクトハ黄菊也　ソカトハ承和ヲイヒナシタル也……ヤカテウルハシクソワキクト（高本K・京本・前本とも同じ声）カケル本モアリ……

無名抄云……シカミサエタトイフハヲノレトイヘル也

上上上
ミサエ（高本K）トハ下枝ト云也……

奥義抄云……イロノテコラサトハイロノテリコキサマトヨメリ　シカミサエタトハシヤカシタエタト云也……

b シカサス。エタトハシカモサス枝ト云ナリトイヘリ　コノ歌ノコトハ奥義抄ニモクハシクシルセリ　其中ニ　第四句ハ　シカミ

平上(墨圏内朱)
サエタトコソマウシナラハシタレ　シカトハシヤカト云詞ナリ　ミサエタトハ下枝ト云ナリ　ソカキクハ承和菊ナリ……

浄弁本拾遺集はそのアクセントから「繁(しげ)み小枝(さえだ)」の一語とみること既に[16]書いた。だが拾遺抄注や袖中抄では、無名抄・奥義抄に従い、対称の代名詞の「汝(し)が」説をとる。「其(し)が」は書紀に〈上上〉とありアクセントも一致する。続く語を袖中抄では無名抄・奥義抄によって「下枝(みさえだ)」説をとった。タが単点であるのは問題だが、袖中抄は特に双点を差さないと読み誤まる箇所に双点を差すのが一般方針なので、ここは単点でもミサエダと詠んだものであろう。(ついでながら袖中抄のテコラサのコも単点だが、拾遺抄注・浄弁本拾遺集同様、テゴラサと詠んだものと思われる。)ところが拾遺抄注では「汝が差す枝」説をとり、〈上上平上○○〉と差声した。「枝」はここでは複合していないから本来のアクセントのままなので〈上上〉を付す必要がなかったものと思う。更に右傍注に「ミサ　常説」として〈上上〉を付した。即ち「常説」としては袖中抄と同じ「汝が下枝(みさえだ)」〈上上上上(上平)〉を注記したわけである。

拾遺抄注は寿永二年(1183)に二品大王(守覚法親王)の仰せにより注進し、「其後又下預差声」し、更に建久元年(1190)七月に再び二品大王に「奉授」のものである。袖中抄もまた寿永二年頃成立かとされている。顕昭は先行説である「汝が下枝(みさえだ)」では歌意が通りにくいと考え、「汝(し)が差す枝」説をとり、常の説を傍注としたのではあるまいか。とすれば、この箇所に関しては拾遺抄注が袖中抄よりも後の成立ということが言えるように思われる。

なお「そかきく」の声点は、袖中抄・拾遺集ともに連濁の有無を除いては同じであり、拾遺抄注も恐らく同じアクセント型であろう。「そか」については諸説あり、袖中抄や六百番陳状[17]で「承和」を言いなしたものとし、「ソワキク」とする本もあったとしるす。「承和」のようなサ行拗音を直音で表記するのは、古今集の「承均」を「そうく」とする例もあり珍しいことではなく、「そわ」を書くのも不思議はない。「ソワキク」の表記から〔soqa^{n}giku〕がまず生まれ、〔^{n}g〕が前にずれて母音の同じ〔so^{n}ga-kiku〕が生まれたことが考えられる。拾遺抄で「ソハ(平)キク」を「常説」としたのは、ソワキクが当時世に行なわれていた証拠であろう。ソクヮキクからソガキクのように直音仮名で書くようになったとするのは当たらない。伏見宮家本古今集真名序に「花粉(ふん)」と書く例もあるが、これは全くの例外である。なお拾遺集の「キ」の連濁は、濁音拍並立をさける習慣から後世の変化形と考えている。

五　神楽歌の注から

「おほよそころも・ゆきのよろしも」〔十210(154)おほよそころも〕

京大本には「古語拾遺」の「みやひとのおほよすからに」23(古典大系「古代歌謡集」475頁)およびその割注「みやひとのおほよそころも」23aの二首を引き、次のような注がある。

上上上上上平平平平上平上上上平平上上平平平平上
みやひとのおほよそころもひさとほしゆきのよろしもおほよそ

ころも」

顕昭云是は神楽の宮人（振仮名に上上上上）の哥也」考古語拾遺云フ……」終夜宴楽哥ヲ曰」

美夜比登能　於保与須我良尓伊佐登保」志由伎能与侶志茂於保与須我良尓」

今俗哥曰」

美夜比止乃於保与曾許侶茂　比佐止保志」由伎乃与侶志茂於保与曾許侶茂」……

今案云我良と伊侶*（高松本は「許侶」）と同音也伊佐と比佐と同」郷△音也（高松本は「同ヒ、キ也」。△字は作字不能。「響」の誤写か）おほよすおほよそ同音也」されはおほよそ衣とはなへての衣と云欤」ゆきのよろしもとは雪の夜と云欤ろは助詞也（＊は「保」を見消で傍記）

「古語拾遺」にあるように「大夜すがらにいさとほし」（23）が俗に「おおよそ衣膝通し」（23a）と歌われるようになったものを、顕昭は神楽の宮人の歌として引き、再出する語を除いたすべてに声点を注記する。但し「神楽歌大前張35宮人」では、第四句が「支乃与呂之毛与」であり、古典大系本・古典全集本はともに「着の宜しもよ・着たぐあいが悪くないことよ」の解釈である。

では、袖中抄の声点及び注釈からこの歌を考えてみたい。第一句は「宮人」の声で問題はない。第二句の「おほよそころも」を注釈では「おほよすおほよそ同音也」とし「なへての衣」とするから、「大凡衣」と解したものだろう。「大凡」は図書寮本名義抄で〈平平□平〉、御巫本日本書紀私記　で〈平平平平〉、古今訓点抄で〈平平○○〉（「およそ」は〈平平平〉）であるから、当時は低平型が多数型であろうか。「衣」は〈上上上〉だが、複合して安定型の○○○○○●○型になったものと思う。

古典大系小西甚一氏の注では「古語拾遺」23aを「大裝衣―正裝。「おほよそひごろも」の転訛。」とし、「神楽歌」35では「疎衣―デザインの簡単な服。……古代ふうの簡素さをいったもの」とする。古典全集の臼田甚五郎氏は「ゆったりとした感じの、古体な神事用の衣らしい。」とする。辞書類も大体似たようなもので、顕昭の「なへての衣」の解は見当らない。

「ひさとほし」は「膝」が〈上上上〉、「通す」が〈平平上〉であるから、「膝、通し」ととってよい。膝の下まで長くゆったりと着なす、という諸説と一致する。

第四句の「ゆきのよろしも」は、小西氏のように「宮人たちの歩いてゆくさまが、ちょっとりっぱだ。」というのが大方の解釈であろう。だが顕昭は「雪の夜ろしも」ととり、「雪」〈上平〉、「夜ろ」〈平平〉の声を差した。この「ろ」は接尾辞で、袖中抄にはこのほか「野ろ・尾ろ」など㈢類平声の名詞について○○型を作る例がみられる。「しも」は古今集に「時しも」〈平平平上〉などとあるのと同様の複合であるから、強意の「し」であり、「ちょうど雪の夜であることよ！」となろうか。注にはないが、「雪」は「行き」をかけたということが、顕昭の「雪の夜ろしも」とした意識の中には全くなかったであろうか。また本歌は「斎酒」であり、「斎忌」は「古語拾遺」[18]に〈上平〉の声が差され「雪」と同じアクセントである。「神楽歌」の譜が「斎酒」の

アクセントを生かした●○調で付けられ歌われていたとしたら、同じアクセント型「雪」を連想することもごく当前のことではあるまいか。そこで顕昭は次のように解したものだろう。

宮人たちがなべての衣を（寒いのでウェストでたぐらずに）膝を越すほど長く着てゆくなあ。（寒い）雪の夜でもあることだし。

六　曾丹集の注から

「お（を）ちのまゆかき・をふちのこま」〔五100（82）あさもよひ、廿456（321）をふちのこま〕

左記の歌の「お（を）ちのまゆかき」には諸説がある。「あふち（棟）」の変化した語として曾丹集の歌を上げるものもあれば、若返る・復活する意の「復（を）つ・変若（を）つ」の眉描きという説もある。「あふち」は京本・前田本和名抄が〈上上平〉、観智院本名義抄が〈上上○〉であるから「おち」に変化したとすれば〈上平〉の声となろう。「復（を）つ」は袖中抄巻七に「ヲチカヘリ」〈上上平平上〉の声点が二か所差されている。だが顕昭は上記とは一致しない〈平平〉の声を差し次のように異なった解釈を展開した。

但曾丹哥云　まくらなるをふち（上上平）のまゆ（上平）」み見るときそいもか手風（平平）はいとゝこひしき（平平平平）」……但□人云是はまくら（平）」なるおちのまゆかき見るときそとよむへ」し　まゆみは僻事也とまうすめり　いつれにつ」くへしともおほえす　此義にてはまゆかきとは」眉つくる筆也　それかおちてあるを見ると」きそいとゝいもはおもひいてらるゝとよめるなり」（京本巻五）

曾丹哥云」

マクラナルヲフチノマユミ、ルトキソ」イモカテカセハイト、コヒシキ…」…

但曾丹カ哥ハヲフチノマユミヲ」

ヲチノマユカキトカキタル本アリ　ソレハイハレタリ」　マユカキトハマユツクリナリ　ソレカヲチ、リタラムヲ」ミテイモカテ風オモヒイテラルヘキコトナリ　弓」ヲミテイモカテ風オモヒイテムハイハレナシ」（高松本E巻二十）

顕昭は眉描筆が落ちているのを見る時、恋人が思い出されるとして、「落つ」の名詞形として〈平平〉を差声した。これは恐らく、「眉描き」で「眉掻き」を想起したもので、万葉集の「眉根掻」2808などにあるように、恋人に逢いたい時には眉を掻くという俗信に連なるものだ。「描く」も「掻く」もアクセントは同じだから、よけいに「眉掻き」を連想しやすいというものだろう。オとヲは同音となっているから、ヲチで落チととることに問題はない。

もう一つここで、「をふち」の意義について觸れておきたい。この語は地名か馬の毛色の斑か、説の分れるところである。顕昭は前述の引用の前後に左のように記している。

ミチノクノヲフチノコマモノカフニハ（上上平平平上）」アレコソマサレナツクモノカハ」

顕昭云　ミチノクノヲフチノコマトハ彼国ヨリイテク」ル小斑ノ駒ト云也（上上平）」後拾遺ニモ　アフサカノセキノスキムラヒクホトハヲ」フチニミユルモチツキノコマ」　此ハスキマノ

ツキノカケノウツリテチヒサクマタラ」ナルヤウニミユルナリ

このあと、奥義抄の地名説をひくが、やはり「ミチノクニヽヲフチトイフ所タニアラハウタカヒナシ」として、地名とすることに疑義をもっている。もし、青森県の「尾駮」ならば、「尾」は平声、「駮」は高起式で、〈平上平〉か〈平上上〉になりそうである。これに反し、接頭の「小」は古今集声点本で「小野・小倉・小塩・小原野」[19]など全例が高平型で、「小」は高起式をつくることが分る。「斑」は日本書紀神代巻に「斑駒」[20]が〈上上〇〇〉、「斑駒」[21]が〈上上上平〉とあり、観智院本・鎮国守国神社本名義抄・伊勢廿巻本和名抄に「フチムマ」(名義抄はブと双点)が〈上上上〉とある。「斑」は恐らく〈上平〉[22]で、顕昭は注に「小斑」と記するようにそのアクセントである〈上上平〉を注記したものと思われる。

七　おわりに

以上、難解とされる一語一語について、顕昭の注釈を差声とあわせ検討してきた。現存する高松本・天理本・京大本・前田本の声点が注釈の示す解釈と一致することから、これらは概ね顕昭自身の差声の写しと考えてよいだろう。更に、顕昭の注釈を考える上で、従来のように差声を抜きにしては論じられないことも明白であろう。袖中抄の注釈には語義をしかと認定しにくいものもあって、顕昭の他書の注釈の差声と比較しなければ分らぬものも多い。また、声点だけで語義の認定の可能なものもあれば、注釈全体をよくよく把握しないと語義を認定できない場合もある。顕昭の差声善本の拝覧可能の限りを調査し得た現在、これらを総合して顕昭の注釈を改めてよむことを心がけ、歌学研究の基礎学の一斑をにないたいと願っている。

注(1)「顕昭の古今伝授と和歌文書」(神戸大学『国文論叢』一二、昭60・3)

(2) a「京大本『後拾遺抄注』声点考」(『早大文学研究科紀要』二八、昭58・3)・b「天理本『散木集注』声点考」(『金田一春彦博士古稀記念論文集一』昭58・12)

(3)『『袖中抄』声点考」(『国文学研究』九三、昭62・10)

(4)「童蒙抄」(『日本歌学大系　別巻一』)283頁

(5) 小林芳規「平安鎌倉時代に於ける漢籍訓読の国語史的研究」587頁

(6) この注からは「異妻」か「異夫」か限定できないとみて後藤氏と共編の「袖中抄声点付語彙索引」には「異妻・異夫」の両義を入れたが、これは秋永の賢しらで後藤氏に責任のないことをお断りしておく。

(7) 鈴木豊「日本書紀神代巻諸本　声点付語彙索引」(『アクセント史資料索引』七、昭63・3)

(8) 上野和昭「御巫本日本書紀私記　声点付和訓索引」(『アクセント史資料索引』二、昭59・4)

(9)「類聚古集巻十六」には、ざっと勘定しただけでも草体を含め明らかに「乎」と書くものが二一五あり、うち「う」一例・「お」三例・「ふ」一例・仮名無し一例のほかはすべて「を」と訓む。「乎」の草体と相似するが「手」と書き

「て」と訓むものが、この歌を含め一一例ある。書写の人が「いなをかも」の説に立っていたために初めに「乎」を誤まって書いたか、草体が相似するために頻出する「乎」の方と誤まったかは不明というしかない。

(10) 拙著「古今和歌集声点本の研究　研究篇上」158頁〜

(11) 吉永登「袖中抄における万葉語の研究—特にその方法論的考察—」(関西大『国文学』1、昭25・5)ではこの部分を引用して「雄」とするが、声点には全くふれていない。

(12) 背中・背後の意のセはソと同源で、ソムク〈平上平〉(名義諸本・古今顕府)・ソビラ〈平平平〉(御巫私記)・ソトモ〈平上上?〉(袖K)などから平声と考える。観本名義の「背」の上声は、伊勢廿本和名に「辨色立成云脊梁　世都賀俗云世美祢」ともに〈上上平〉で、同じく脊柱の意ととる。脊と背が字形・意義の相似からアクセントも混同し、「背」も㈠類となった。観本名義のセッカ、前本色葉のセミネも〈上上平〉だが、色葉のセッカは〈平上平〉で既に混同したかと考えると、観本名義の上声も、直前のソムク〈平平平〉の変化形からおして　混同後のアクセントとなるべきかもしれぬ。背・脊の混同については菊田紀郎「講座日本語の語彙10」275頁にもある。「兄」との関係については別稿とする。

(13) 「万葉集注釈」十四169頁

(14) 注(10)の131頁〜

(15) 秋永一枝「顕昭後拾遺抄注・顕昭散木集注　声点注記資料ならびに声点付語彙索引」(『アクセント史資料索引三』昭59・12)

(16) 拙稿「古今集声点本における形容詞のアクセント」(『国文学研究』八八、昭61・3)80頁

(17) 「六百番陳状」(『日本歌学大系別巻五』99頁

(18) 鈴木豊「古語拾遺　声点付語彙索引」(『アクセント史資料索引』四、昭61・2)

(19) 注(10)の433頁

(20) 注(7)による。

(21) 望月郁子「類聚名義抄四種声点付和訓集成」及び勉誠社版複製による。

(22) 「斑」は現代京都でブチーとブチの両様、東京はブチで第㈤類だと対応するが、この類の語は京都で第㈤類をとりやすく、これが古代のアクセントを受けつぐとは言い得ない。